

会社「三原汽船」の元役員、

観音寺市三本松町の海運

# 「マドロス母ちゃん」

## 女性船長の先駆け

### 生涯を絵本に凝縮

観音寺の元会社役員



絵本「神力丸の羅針盤」を手にする三原さん。手前右はマスエさんに贈った1冊だけの特別版—高松市内

三原康作さん(74)が、女性船長の先駆けとして同社の基礎を築いた母、マスエさんの生涯を描いた絵本「神力丸の羅針盤」マドロス母ちゃんの大波、小波」を制作。子どもたちにも読んでもらいたいと地元の小中学校などにも寄贈した。

マスエさんは1928(昭和3)年、同市生まれ。

17歳で市内の海運業、三原敷さんと結婚し神力丸に乗り組んだ。結婚半年後の8月6日朝、たまたま広島県の宇品港において原子爆弾の爆風に遭い、街の惨状を目撃したが、子どもたちには長い間この体験を話さな

ったという。

4人の子どもの母となった後も、夫を助けて船長の資格を取得。「三原の船は、母ちゃんでもっとる」と言われるほどよく働いた。子どもたちは助け合って両親の留守を守り、後に長男の広茂さんが家業を会社組織に。マスエさんは同社で、

還暦まで船に乗り続けた。次男の康作さんは2022年ごろ、高齢になったマ

スエさんに喜んでもらおうと、得意の文筆を振るって絵本を制作しプレゼント。

絵は、以前に同社がモデルになった絵本「かもつせん(福音館書店)のいちにち」が担当した絵本作家の谷川夏樹さんが担当した。マスエさんは24年に死去。今回の絵本は、マスエさんに贈った絵本を低年齢向けに再編集、船乗りを意味する「マドロス」を副題に

取り入れて500部制作。一部は観音寺市や三豊市の図書館などに寄贈した。

康作さんは「女性船員の先駆けとして生きた母と家族の絆を描いた。母の心には生涯、平和への祈りもあったと思う。多くの方に手に取ってもらえれば」と話している。

県内の書店やインターネット通販でも販売している。美巧社刊。1100円。